

『雫に濁る』の結末

— 「めでたし」をめぐって —

一 はじめに

北島優子

『雫に濁る』は、全体のほぼ三分の一を占めると予測される前半部分が欠落していることを理由に、研究が殆ど進められていない物語である。しかし、本物語が鎌倉時代の物語史を埋める作品であることに変わりはなく、他の中世王朝物語と比べて特異な点も持っていることから貴重な物語であると言えよう。現存するのは実践女子大本のみとされてきたが、一九九四年、日下幸男氏により聖護院本が報告された。この発見があったにもかかわらず、両本に大きな異同がないと判断されたため、研究は依然として進められていない。『雫に濁る』の研究に関し、福田将士氏は、

と述べている。確かに散逸部分を抜きにしては研究が困難な箇所はある。しかし、現存本文から考察可能な問題もまだあるのではないだろうか。散逸部が発見されない今日、まずは現存本文をもとに作品を考える試みを行う必要があると考え、本稿では物語の結末に注目し、『雫に濁る』とはどのような意図をもって描かれた物語であるかを考察する。

二 『雫に濁る』の結末における「めでたし」

『雫に濁る』の結末は、次のように記されている。

研究展望としては、まず第一に散佚首部が発見されることである。この前提なしでこれからの研究を展望するのは困難で

文学的価値も図りたい。

おとどは、一品の宮と申し合はせて、「めでたきまつりごとなり」と、民まで言はれ、めでたかりけるとかや。

これを御覽せむ人は、念仏申させ給ふべし、必ず、必ず。

(三四頁)

「めでたきまつりごと」、「めでたかりけるとかや」というように、宰相の中将与一品の宮が協力して政治を行く様子を、「めでたし」を繰り返して讀める一方で、読者に対し念仏を唱えるよう求めている。この、一見ちぐはぐな結末に向かつて、『零に濁る』という物語は展開されている。この結末部に注目し、本作品について考えていきたいと思う。あらためて結末部の本文を引用する。

年月過ぐるほどに、内裏の上、七つにならせ給ふほど、うつくしく、故院の御顔を写し取りて、母の面影にも違はねば、この世の人とも見給はず。

関白殿、世のまつりごと①めでたく、天の下に、あやしき民まで受けられ、②めでたきためしに引きけり。

前のおとどは、よろづ、目の前に変はることを見て、くちをししく思しけれども、ことわりのことなれば、ものも言はずぞ過ぐし給ひける。

内裏の上は、一品の宮を、母と思し召し、おとどに、何ごとをも仰せ合はせられて、あさましきまで思ひ出で給ふさま、ためしなきほどなり。

三月二十日あまり、南殿の桜盛りなるに、清涼殿の南面に、花御覧するついでに、御遊びあり。(中略)いと面白き世の御遊びなり。それにつけても、おとどは、昔恋しく思し出でて、うちしほたれ給ふ。し果てて出づるほどの縁ども、おのおの③めでたし。女房の装束、細長などしたるべし。(中略)

おとどの参り給へるに、走りおはして、「あのよな、内侍督

とは、誰ぞ」と仰せらるれば、「それは、御上の御母よ」と申し給へば、「さて、宮は、誰ぞ」と仰せられたるさま、あはれに④めでたし。「それも、母よ」と申し給へば、「あらぬよ。姉ぞかし。内侍督こそ、母よ」と仰せられて、涙を浮か給へる御さま、「よくよく申し聞かする人あるべし」と、あはれにて、うち泣き給ひぬ。御髪掻き撫でて。「八月に、御元服あるべし。添ひ臥しには、おとどの姫君参り給ふべし」と、今よりののしるめり。

帥の中納言といひしは、今の大臣ぞかし。おとどの御舅よ。おとどは、内裏につとつき参らせておはすれば、そのままにぞ、まつりごととありける。おとどの北の政所は、二位殿とて、つと候ひ給ふ。君達七人おはします。「何ごととも、前の世の契り」と、御心ばへどもさへ、⑤めでたく言はれ給ふべし。おとどは、一品の宮と申し合はせて、「⑥めでたきまつりごとなり」と、民まで言はれ、⑦めでたかりけるとかや。

これを御覽せむ人は、念仏申させ給ふべし、必ず、必ず。(三二〜三四頁)

この場面には帝の即身成仏から七年が経過し、成長した若宮と、彼を取り巻く人々の様子が描かれている。本文を読むと、「めでたし」という表現が繰り返し用いられていることがわかる。「めでたし」の用例は、『零に濁る』全体で十六例あり、この結末部にその内の七例が集中している。結末部で「めでたし」を集中的に用いることはどのようなことを表しているのだろうか。

「めでたし」が多用されていることについて考える前に、この結末場面で用いられている「めでたし」がそれぞれのどのような意味合いで用いられているか確認しておく。原田芳起氏によれば、「めでたし」は、動詞「めづ」の連用形「めで」に「いたし」が付いて熟合した語で、主観的な心情を表すよりも、客観的に称賛すべき対象の状態を表す傾向が強く、中古においては審美的批評語彙の一つとして重要な位置を占めているという。³⁾ 武山隆昭氏は、「めでたし」の意味を次のように説明している。

あらゆる所で「最高の称賛表現に用いる総合評価語」として広く用いられる「めでたし」は、一と二で論考したように、その根幹に「価値の高さ」という概念を有しながら、その時その場で表現する内容（美か善か理想か卓越性等）にバラエティを持って用いられている。

この論に従い、『雫に濁る』結末部における「めでたし」も「最高の称賛表現に用いる総合評価語」として用いられていたと考え、考察を進める。この場面における「関白殿」「おとど」とは宰相の中將のことを指している。①の「めでたく」が指すのは「まつりごと」であるから、宰相の中將が行う政治の素晴らしさを讃え、②「めでたきためし」は素晴らし政治の例として宰相の中將の政治があげられていることを意味している。③の「めでたし」は「禄ども」を指し、宴で与えられた禄が立派ですばらしいものだと言っている。④の「めでたし」は、亡き母内侍督について尋ねる

若宮の様子が気の毒で可哀想ではあるが、その様子がまた素晴らしきという意味に解釈できる。⑤の「めでたし」は、宰相の中將が、一族の繁栄を自分の功績としてではなく、「前の世の契り」だと理解する心のありように対する称賛と考えられる。⑥の「めでたきまつりごと」は宰相の中將が一品の宮と相談しながら行っている政治の素晴らしさを意味し、⑦の「めでたかりけるとかや」も、同じくその政治の様子を讃えている。結末部で用いられる七例の「めでたし」のうち、四例が「まつりごと」に対する称賛である。

では、このように物語の結末において「めでたし」を繰り返し用いることは、どのようなことを意味しているのだろうか。次節では、結末部に「めでたし」を用いている他作品と比較しながら、『雫に濁る』の結末をどのように捉えるべきか考察する。

三 他作品結末部における「めでたし」

そもそも、結末部において「めでたし」という称賛表現を多用するということは、『雫に濁る』と言う作品独自の結末なのだろうか。このことを確認するために、他の物語作品の結末部でも「めでたし」を多用する例があるか調査したところ、『雫に濁る』執筆以前に成立していたか、もしくはその可能性が高い作品で、結末部に「めでたし」が用いられている作品としては『栄花物語』『住吉物語』がある。以下、該当本文をあげる。³⁾

『栄花物語』巻第四十「紫野」

宇治殿に四条宮おはしますころにて、宇治橋見やらるるほど

に御棧敷いみじうめでたくて、女房の衣のこぼれ出でたるほど、絵にかかまほし。(中略)かくて佐保殿に着かせたまひて、祭の儀式、有様、世の常ならずめでたくてまゐらせたまふ。積れる人、大殿のかくておはしましたしに、御孫にてかくおはしますを、枝々栄え出でさせたまふを、春日の神も心ゆかせたまひてや、めでたく見たてまつらせたまひけんと、心の中に思ひ余りけるを、同じ心に賤の男までめで思ひ申しけり。またの日帰らせたまふ。御供の人々みな、今日ばかり装束うち乱れ、今すこし思ひやり深く、世にまた三笠の山のかかるたぐひなく、めでたう思ひ余りて、車ひきとどめつつ、道すがら見る人の、

行く末もいとど栄えぞまさるべき春日の山の松の梢はなど、古めかしき人の思ひける。

『住吉物語』(甲南女子大本)

かく年月ふり行くままに、大將殿に父の関白譲り給へり。いよいよめでたく、繁昌限りなし。(中略)

昔も今も、長谷の観音は験あらたにおはします。末遙々と栄え、心あらむ人はよくよく見給へ。わろき人は、目の前に消え失するなり。心あらむ人は、見ても偲び給へとて、書き付け侍るなり。

同
(藤井本)

大將、姫君、末まで繁昌して、めでたくぞおはしける。むかしもいまも、人にはらぐろなる人はかゝることなり。

同
(晶州本)

これを見きかむ人々は、かまひて人よかりぬべきなりとぞ。世の人うけ給て、「かゝる御心なれば、御果報めでたくありがたくおはします」とぞ申ける。

いまま昔も長谷の観音はしるしあらたにおはしましたけり。なさけある人は行末もさかへ候也。むくつけ人は、まのあたりにかれうする物也。ありがたくあはれなる事を、末の世の人ぎも、しのばれ候へかしたとて、書をきしなり、

同
(内閣文庫本)

大將、姫君、末まで繁昌して、めでたくぞおはしける。

さて、まゝ母、見と聞く人々、心あるもなきも、うとみ果てければ、哀に敗れたる家に明し暮して、泣くより外の事はなし。(中略)

なさけなき物は、栄みじかく、情ある人は、はる／＼と栄へ侍り。是を見聞かん人々は、構ひて、人よかりぬべきなりとぞ。

同
(広本系 野坂家本)

かくて北の政所、今は思ふ事もなくて、御命は、住吉の松の千歳を譲られ給ひしかば、末／＼迄、遙／＼と栄へ給ひて、命、長尾の峰に生ひたる菅の根よりも、長／＼しき御代にて、御年は九十九迄、保ち給へる。御果報、目出たき例にも、これを引くべし。

(中略)さあらば、いかでか、観音の利生、なからんや。ゆめ／＼疑ふべからず。神事給はば、親族繁昌、寿命長遠、疑

ひあるまじきなり、く。)
同 (大東急本)

あはれなること、さてしもむなしくならんことのいたはしさに、末の世まで、心あらん人は思ひ知るべしとて、かくのごとく記しはべり。これを見ん人々、ゆめゆめ人のため後ろ暗きことを、ふるまひ思ふべからず。

何とただ年月物を思ひけんかかるめでたき世にもあひつつ

以上をもとに考えると、「めでたし」が、「枝々栄え出でさせたまふ」(『栄花物語』)、「末遙々と栄え」(『末まで繁昌』)「親族繁昌」(『住吉物語』)などの語と共に用いられていることから、結末部における大団円の中でも、特に一族、子孫の繁栄を描く際に用いられていたことがわかる。しかし、『うつほ物語』や『落窪物語』のように、女君を中心とする一族の繁栄で物語を結んでいるものの、その際に「めでたし」を用いていない作品もある。平安後期にかけて執筆された物語では幸福な結末を描く作品が多くないため、参考とし難いが、中世王朝物語において再び一族の繁栄を描く物語が増加すると、それらの作品の結末では「めでたし」が用いられるようになってきている。例えば『むぐら』『あきぎり』『木幡の時雨』『小夜衣』『海人の刈藻』から、結末部に「めでたし」を多用している様子が確認できる。

『むぐら』

御末々のめでたきは、書き尽くすべきかたもなしとぞ。新院

の御母、女御院の御有様、めでたしと申すもおろかなり。思ふ様、御功德ども作らせ給ふ様、心も及ばず。山の井といふ所に、なべてならずめでたき御堂作らせて、今はさやうの御事のみ営みて、尊くめでたく行ひてぞおはしましける。まことや、新□□の御乳母子、侍従と言ひしは、今は播磨の中將とぞ言ひける。ただその後は、この御ゆかりの事のみめでたきためしにて、公卿、上達部の、若君姫君出でおはしましぬれば、この女院、中宮などの御衣をぞ、初衣などに申し下ろしてし給ひけるとぞ。

『あきぎり』下巻

中宮よりも、忍びたれど、めでたく思し置きて給へり。内侍の君、やがて親ぎまに添ひあつつ、心の及ぶばかり営み給へば、いとめづらかなる御ありさまどもなり。

御局、梅壺なり。いと幼き御ありさまどもに、互ひの御遊び敵と見えて、世にありがたき御なからひなり。中納言の内侍ときめき給ふさま、なのめならずめでたし。方々、かかるめでたき御ことどもは昔も多く言ひ伝へけれど、かかる類はありがたき行方ども、さのみ言ひ尽さんもなかなかなり。(中略)まことや、かの中宮のかゝるありがたきすくせのめでたさを、のちのよの人に見せてまつらんためにかきとゞめぬ。

『木幡の時雨』

三の君、春宮の御母なればとて、やがて后に居給ふ、めでた

かりしことどもなり。帝は、時雨がちなる雲居の内も、いまぞ御涙くもらで御覽じける。いまは、大将、大臣になりて、父関白の御譲りにて関白し給ふ。帝、何ごとの給ひ合はせて、めでたき御代のさまなり。(中略)「なほありがたくめでたかりける御契りに、ありし折、我も人ももの思ひけん」と思し知らる。(中略)めでたき御有様、見奉らせ給ふ御心、ありし折はかかるべしとや覚え給ひし、さばかりつつましかりしことどもの、めでたき御代の末なり。(中略)「帝をはじめ奉りて、めでたき人の御さまかな」とぞ聞こえ合へる。心知らぬ人々は、「女御の御おぼえめでたきにぞ」など申し合へり。

『小夜衣』下巻

さて、若宮、春宮にゐ給ひぬ。春宮、位につき給ふ。そのほどの儀式、めでたしともいふはかりなし。院・大宮の、今ぞ、年頃の御本意かなうて、御祈りの僧都・僧正に、国・荘など賜ひける。御息所も、またきしろふべき人なければ、中宮をば皇后宮と聞こえて、后に立ち給ひぬ。そのほどの儀式、いへばさらに、書き続けずとも、見給はん人々はおぼしやるべし。おなじ后・女御といひながら、これは、ことわりも過ぎめでたし。(中略)かくめでたき御事ども聞くにも、我がおほけなき心の有様、かく連の尽きはつべきにこそありけれ、とぞ思ひける。

少納言の御乳母は、三位になりぬ。小侍従は、内侍になりぬ。右近といひしは、中納言になりぬ。花の咲き出づるやう

に、めでたし。(中略)かかるめでたき御末々にもおはしましけるものをと、めでたきためしに、この御事をぞ、世の人も思ひける。(中略)

宰相の君も、年頃、宮仕へにてこそかすかなりしに、今は、北の政所と聞こえさせて、世の掟てになり給へる、めでたかりけるさいはひかなと、かたへの人々も羨みあへり。(中略)一かたならぬめでたさいふはかりなし。(中略)中宮の御光といひ、北の政所の御事といひ、ひとかたならぬめでたさいふはかりなし。(中略)年月過ぎ行きて、姫宮、十になり給ひぬれば、春宮の女御になり給ひぬ。うつくしき御あはひども、めでたし。今は、一の宮をぞ、御位にも、とおぼしめしける。かかる御宿世どもの、めでたく思ふさまなる事ども、なかなか書き尽くすべくも侍らず。(中略)

人のめでたきためしには、山里の姫君にまさる人あらじと見えたり。見給はん人々も、思ひやり給ふべきなり。

『海人の刈藻』巻四

殿の女御、后に立ち給ふ。めでたきこと限りなし。

嵯峨の入道殿、この后立ちを見給はではとて、あながちに御車にて出で給ふぞあはれなる。そののち、御齡九十一にて、遂に隠れ給ふ。めでたき例にぞ人申しける。

殿の中納言、今は大納言と聞こゆ。左大臣空き給へるに、右の大臣上がり給ひて、大将殿、右大臣と聞こゆ。大納言を大将と聞こゆ。権の中將、中納言と聞こゆ。この御末々栄え

させ給ふこと、めでたかりしことなり。

これらの作品からも、先述の『栄花物語』『住吉物語』と同様に、一族の繁栄の様子を語るために「めでたし」を用いている様子が窺える。以上をもとに考えると、中世王朝物語の結末部において、「めでたし」は一族の繁栄という幸福な結末を示す際に用いられていたと考えられる。先述の通り、一族の繁栄という幸福な物語の終わり方は、『うつほ物語』など早い時期の作品にも取り入れられていたが、その頃は「めでたし」と結びついていたとは言いがたい。しかし、『むぐら』『住吉物語』『雫に濁る』『あきぎり』『海人の刈藻』『木幡の時雨』『小夜衣』といった作品では、共通して「めでたし」が用いられていることから、『雫に濁る』執筆当時、一族の繁栄という幸福な結末で物語を締めくくる際に、「めでたし」を使用することが特異な記述ではない様子が窺える。先行作品を踏まえて執筆される中世王朝物語の特徴をもとに考えると、『雫に濁る』作者が、幸福な結末を「めでたし」を用いて表現している作品の存在を知らなかったとは考えにくい。従って、『雫に濁る』の結末場面は、一族の繁栄の様子を語るために「めでたし」を用いる作品があることを承知した上で創作されたと考えられる。

それでは、このような物語制作の流行の中で、『雫に濁る』の結末を定型の一つとして捉えて良いのだろうか。福田景道氏は『小夜衣』の結末に関する言及の後、王朝物語の結末について次のように説明している。

山里姫君は摂関家の出身なので、一族による摂関職・帝・后の独占をもって至上のめでたさと見なしているに違いない。同様に一族の独占の栄華で終結する王朝物語は多い。

先述のとおり、「めでたし」を結末部において用いる『むぐら』『あきぎり』『小夜衣』『海人の刈藻』において称賛されているのは、一族の繁栄であるが、より詳しく言えば、ある一族が栄華を独占する様子を表しており、これらの作品は「一族による摂関職・帝・后の独占をもって至上のめでたさと見なしている」とする福田氏の論にあてはまる。例えば、『むぐら』では「この御ゆかりの事のみめでたきためし」という記述からわかるように、女君に連なる一族のみが栄華を極めていく様子が見られる。そして、一族の繁栄の様子を詳しく見ていくと、その繁栄の中心に帝と一族をつなぐ女性の存在（『あきぎり』の「中納言の内侍」、『木幡の時雨』の「三の君」、『小夜衣』の「御息所（山里姫君）」など）を見出すことができる。つまり、これらの作品の結末部では、「めでたし」を用いて、寵愛を受ける女性を中心とする一族の繁栄を描いているのである。しかし、『雫に濁る』においては、物語中盤で内侍督が亡くなっていること、若宮がまだ幼いことから、結末場面で寵愛を受ける女性が存在しない。さらに、「めでたし」の称賛対象となっているのは、宰相の中將と一品の宮が協力して政治を行う様子である。この二人を同じ一族ということはできないため、この結末部で「めでたし」と讃えられているのは、宰相の中將一族が栄華を独占する様子ではないと言える。このように考えると、『雫

に濁る』は、結末部に「一族の独占的栄華」を描く、中世王朝物語の定型に倣う作品とは言い難い。

以上、他作品との比較を通じ、物語の結末部において「めでたし」が繰り返されることは、どのようなことを表しているかについて考察した。一般的に物語結末部で「めでたし」は、物語の中心となる女君の一族の独占的繁栄を讃えている。また「めでたし」を繰り返し用いることでその素晴らしさを読者に伝え、幸福な結末を印象付けているのだ。しかし、『雫に濁る』では、宰相の中将一族が繁栄してはいるものの、一品の宮と協力する様子が称賛されていることから、独占的栄華とは言い難い。つまり、一般的な物語の結末の定型として、『雫に濁る』の結末を捉えることはできないのだ。さらに、結末部の「めでたし」で繰り返し称賛している内容が、「まつりごと」である点も、『雫に濁る』が単なる定型に沿って描かれた作品ではないことを示していると考えられる。他の物語作品において、「まつりごと」を讃える語句を確認したところ、『うつほ物語』と『浜松中納言物語』において「かしこし」、「落窪物語」において「やむごとなし」、「源氏物語」において「御心にかなふ／かなはぬ」、「我が身にたどる姫君」において「すなほ」という語で評価されている。従って、物語作品において「まつりごと」を直接「めでたし」と称賛することが一般的であったとは考えられないのだ。

このように、物語結末部で「めでたし」を多用しながらも、一族が栄華を独占する大団円の様子ではなく、宰相の中将と一品の宮の協力統治の様子を讃えていることから、本作品が単なる物語

の定型に沿った結末ではないことが確認できる。「めでたし」を多用することで一族の独占的栄華を讃える他作品と異なり、「めでたし」を宰相の中将と一品の宮が協力して「まつりごと」を行う様子を讃えるために用いている。つまり、『雫に濁る』は、二つの一族が協力する様子に価値を見出し、その結末を意識した上で描かれた物語であるとは言えないだろうか。次節では、結末に至るまで展開を追いながら、なぜ二つの一族の協力を結末に描いたのかという点と、物語はこの結末を意識して描かれたのかという点について考えたい。

四 『雫に濁る』の物語展開と構想

二つの一族の協力を結末に描いた理由を考える上で、まず、宰相の中将と一品の宮の協力を結末に描く理由について考えたい。宰相の中将は内侍督の兄であり、一品の宮は中宮の娘であることから、二人は別の一族に属する人物である。結末部において、二つの一族が協力する様子が称賛されることは、そもそも、この両一族がこれまで良好な関係になかったこと、協力が達成されていないことが踏まえていると考える。この一族同士の対立は、散逸部で描かれていたと推測されるように、帝の寵愛が内侍督に向けられたことから始まったと思われる。中宮が、

女院も、内侍督のことゆゑにこそ、かたみに、御心置かれ給ひしか。その前々は、いづれの御方候ひ給へど、我をば、すぐれて、え避らぬ者にこそ思したりしか。(三二頁)

るといふ現状に対する苦悩はもろろあつただろうが、それだけが原因で亡くなったとは考えにくい。

内侍督は、ただ弱に、心地なり給ふに、さすが、あはれなること多く、「①乳母など、宰相の中將をはじめて、いかに、あはれに、あへなく思さん」と思ふをうちはじめ、さすが、中納言、「わが心を違へじ」と、近くも寄らず、心を尽くし思しあつかひつるも、「今は、さりと」と思したりつるも、「②あはれ、げに、生きたらば、さのみも、いかに従はざらん」と思ふ心憂さ、また、「③靡きにけり」と、内裏の聞かせ給はん恥づかしさなどにも、なかなか、「④なからんのみぞよからめ」と、深く思し取りて、ただ同じきさまにのみおはす。

(一一一—一二頁)

と回想していることからわかるように、内侍督入内以前、他に后妃がいたにも関わらず、帝と中宮の關係は良好であつたことが窺える。当時の関白は中宮の父親である前のおとどと考えられ、中宮と帝の關係が良好である以上、両者の關係がうまくいっていないとは考えにくい。しかし、寵愛が内侍督に移つたことで、帝と中宮の關係に亀裂が生じ、帝と中宮一族の關係も冷え込み始めたと考えられる。内侍督の親族は、物語に登場しないことから、両親は既に亡くなつていと推測され、兄宰相の中將のみとなつてゐる。ここで、内侍督に兄弟もおらず、中宮が皇子を産んでいれば、内侍督に寵愛が移つたとしても、中宮一族はここまで焦ることとはなかつただろう。後見の弱い女性が皇子を生んだとしても、中宮に皇子がいれば彼らの立場は揺るがず、一族の将来の繁栄も揺らぐことはないからである。しかし、現実には、内侍督には兄がおり、中宮には娘しかいなかった。さらに内侍督は両親がいなしいとはいへ、摂関家の出身である。この状況で内侍督に寵愛が移れば、内侍督が皇子を生み、その後見に宰相の中將が選ばれ、権力が中宮一族から内侍督一族へ移行する将来を想像するのはたやすい。つまり、帝をめぐる内侍督と中宮の対立が内侍督一族と中宮一族の対立へと広がつていくのである。

この対立状況が解消に向けて動くのは、内侍督の死後である。従来、内侍督の死は、帝と中納言に挟まれた苦悩の末の死と考えられてきたが、内侍督の置かれた立場を踏まえると、将来を見据えた選択の結果——すなわち自死——と読むことができるのではないだろうか。帝の寵愛を受けながら、中納言に思いを寄せられ

傍線部④「なからんのみぞよからめ」という記述から、内侍督が死を決意する様子が窺える。注目したいのは、「なからんのみぞよからめ」に達するまでの、内侍督の心の動きだ。傍線部①「乳母など、宰相の中將をはじめて」という記述からわかるように、内侍督が、死に近づく己を意識した時、彼女の頭に最初に浮かぶのは、中納言や帝ではなく乳母と宰相の中將で、彼らが自分の死をどう思うかを心配している。この二人は、彼女の死によって受ける影響が特に大きい人物と言える。

これ見聞こゆる宰相の乳母・中將などは、「忌々しく、ゆゆ

しく思はじ」と思へども、涙のみぞ落つる。「ありしままにて、かかる御ことのおはせましかば、いかばかりめでたからまし」と思ふにも、中納言殿ぞうらめしき。(八〜九頁)

傍線部「ありしままにて、かかる御ことのおはせましかば、いかばかりめでたからまし」に、内侍督の立場が自身に与える影響を意識している乳母の心境が描かれている。「ありしまま」で第一皇子を出産していたならば、内侍督は第一皇子の母として扱われ、その女性に仕える乳母の立場も、必然的に高くなるのである。

御湯殿の儀式などは、ただ、立ち添ひ給はずといふばかりこそあれ。御弦打ち、例のことなれば、清げに障りなきを選びすぐりて、五位十人、六位十人、御湯殿の具足、なのめならぬことどもなり。何にも、「今上一の御子」と書きつけられたるを持給ふ。宰相、「かかる人の親となり給ふばかりの人の御宿世の、などか、同じくは、曇りなからざりけん」と、くちをしきこと限りなし。(二頁)

この場面には、宮中で若宮の儀式を整える宰相の中将の様子が描かれている。「今上一の御子」として扱われる若宮を見て、宰相の中将が内侍督の現状を残念に思う様子が読み取れる。内侍督が第一皇子の母として正式に扱われれば、彼の権力を支えることに繋がり、さらに将来、若宮が即位すれば、外戚として、帝の後見という立場に立つことも可能だ。

このように本文の記述をたどると、内侍督一族とその縁者の繁栄が、内侍督に託されていることがわかる。死を意識した内侍督が、乳母と宰相の中将に与える影響を真つ先に気に掛けることから、彼女も、自分に向けられる期待を理解している様子が窺える。前出「乳母など、宰相の中将をはじめて、いかに、あはれに、あへなく思さん」という箇所からわかるように、内侍督は己の立場を理解し、自分の死によって、内侍督一族の将来が左右されかねないことを意識しているのである。これに続き、内侍督は中納言との関係を考え始める。この時点で、中納言と内侍督に肉体関係はなく、思いを通わせ合っているとさえない。内侍督は傍らに居る中納言の様子を見て、前出②「あはれ、げに生きたらば、さのみも、いかが従はざらん」と思い、生きていれば、中納言に靡かざるを得ない現状に「心憂さ」を感じているのだ。内侍督は中納言に思いを寄せているわけではなく、彼に従ってしまうことを不本意に思っている。そのうえ、このままでは、中納言に靡いたと帝に思われてしまう「恥ずかしさ」にも繋がると思考を進める。この「恥ずかしさ」とは、体面を意識した感情だ。帝に愛されていたにもかかわらず、中納言の思いに流されれば、それを知った帝に、内侍督は中納言を慕っていたのだ、と思われ、一族共々体面を失うことになってしまう。内侍督は、帝からどう思われるかというところが、一族の今後に繋がることを理解している。中納言の側で過ごし続け、内侍督が中納言に靡き、不倫の噂が現実となれば、宰相の中将と若宮の立場は厳しいものとなる。中納言に感謝以上の思いを寄せているわけでもない内侍督にしてみれば、一族の将来

を考え、我が身の潔白を示すために死という選択をしたのではないだろうか。実際、潔白を貫いた内侍督の姿勢は、若宮の正当性を守ることに繋がっている。

「もしや」と、人々まもり給へど、今はの御ありさましるきわぎなれば、悲しとても、さてあるべきならねば、音羽の山の麓にて、煙となし奉り給ふに、さらに燃えやり給はぬを、人々、「思ひ置く御ことあるにこそ」と申す。「いかさまにも、一の御子の御ことにてこそはあるらめ」と思せば、忍びやかに、御心知りの人、このよしを奏し給ふ (一五頁)

傍線部「一の御子の御こと」からわかるように、火葬された内侍督の遺体が燃えない原因は、内侍督が若宮に対する未練を残したまま亡くなったことだと噂されている。

後の宮の宣旨かぶらせ給ふ。一の宮の御こと思し召すにも、なほ飽かず思さるれば、今一際添ふべし。「一の宮の御母なるによりて、贈皇后宮と贈り奉らせ給ふ」と、宣命読み上げたるを聞き給ふ宰相の中将・中納言などは、今一際の悲しき添ひで、そぞろ寒きまで思しけるに、くちをしくてやみ給ひにしかば、中納言、「ただ、我ゆゑぞかし。人をも、いたづらになし奉りぬ」と、恐ろしく、何につけても、女の御ためは、かたじけなき御宿世なり。 (一六頁〜一七頁)

事の次第を聞いた帝は、内侍督に皇后宮の位を贈る。また、その際、傍線部「一の宮の御こと」、「一の宮の御母」という記述から、第一皇子の母であることを意識し、后より上の皇后宮の位を与えたことがわかる。彼女にこの位が贈られたことにより、生まれた若宮の正当性は広く保証された。帝のこの行動も、内侍督の潔白を信じたことができたからこそのものである。内侍督が中納言に靡いていた場合、若宮は帝を父とするものの、別の男性と通じた女性を母に持つこととなり、若宮の立場を危うくしかねないだろう。内侍督は、若宮の正当性を証明するためにも、中納言に靡くことなく死を選び、その立場を守ったのだと言えよう。

この内侍督の死により、内侍督一族と中宮一族の対立はますます深まり、帝と中宮一族の対立も深まったかのように思われる。しかし、彼女の死が結果的には、結末に描かれる対立解消の第一歩になったと考えられる。なぜならば、内侍督が中納言と関係をもつことなく死去したことで、帝と宰相の中将の中宮一族に対する恨みも根深いものとならなかつたからである。また、若宮の正当性が保証され、帝と宰相の中将の関係が良好であるのも、内侍督が中納言に靡くことなく亡くなったことによる。そして、帝に出家を決意させたのも内侍督の死である。帝は中納言に対し、

「便なき人」と、深く思し召してしかば、「参り給へ」とも召さず。はしたなきことどもあるべけれども、「今は、この世にても、かくても」と思し召せば、思し召し変へず。 (二四頁)

と考えていることからわかるように、自分の代において、この対立の解消を考えていない。この状況で帝が政治に影響力を持ち続ける限り、二つの一族の対立は内侍督一族の勝利で終わり、協力する体制が築かれることもなかっただろう。しかし、内侍督の死を契機として帝は出家を意識し始めている。そして母のいない若宮を養育するために、中宮の娘である姫宮を取り立て一品の宮とし、宰相の中将に権力を移行していくのである。この時点で、中納言が出仕していた場合、中納言と宰相の中将の間で生じる権力闘争は避けられない。しかし、中納言が内侍督に死をもたらししてしまったという自責の念に駆られ、政治の舞台に出てこないことから、役職をめぐる対立は避けられているのである。以上のように考えると、一族と若宮の将来を見据え、内侍督が死を選んだことにより、内侍督一族と中宮一族の対立はそれ以上の深まりを見せず、解消へと向かい始めたと言える。

さらに、対立の解消を実現させた要因として、帝の言動が大きいと考える。先述の通り、内侍督に皇后宮の位が贈られ、権力の均衡は宰相の中将の側に傾いた。一般的に考えれば、若宮の後見を宰相の中将に任せ、内侍督一族が栄華を独占し、繁栄する様子が描かれると考えられる。しかし、『零に濁る』においてはこの状況下で、帝は中宮との娘（後の一品の宮）を若宮の後見とし、若宮を彼女に預けることを決めるのだ。帝は、彼女との会話の中で、内侍督の死について語った直後、次のように告げている。

形見にとどめ置きて侍る人、またも侍らぬを、見置きがたく

など思ひ侍り。御子にせさせ給ひて、わが侍らざらむ折の形見とも御覧せよ。七日過ぎなば、迎へ取りて、預け奉らん。

（二八頁）

これにより、彼女は若宮の後見役として一品の宮の位に就くこととなる。娘に一品の宮の位が贈られるという処遇により、中宮の若宮に対する心情は変化する。

姫宮、一品の宮になし奉らせ給ひて、その御方に、一の宮おはしまさせ奉らせ給ふに、方々の、あはれにも、疎かに思し召されんやは。ともすれば、抱きあつかはせ給ふを、中宮は、心づきなく思し召さるれど、母のおはせばこそはめざましからめ、今まで儲けの君もおはしまさぬに、姫宮の御ため、行く末頼もしく思し召し置きつるも、さすがに、あはれにおぼえさせ給へば、思しも放たれず、見奉りなどせさせ給ふに

（二二頁）

傍線部に見るように、内侍督が亡くなったことと、娘の立場が若宮の後見として確立したことにより、中宮の若宮に対する悪感情が薄れていることが分かる。また、帝が「御子にせさせ給ひて」と言っていたことから、若宮の後見としての一品宮の立場は、実母内侍督に代わる母としての立場と理解できる。娘の将来の立場が保証され、その保証を支える存在として若宮を見るからこそ、中宮の若宮に対する嫌悪は緩和され、対立解消に向かっていくと考

えられる。

その後、若宮は東宮に、その後見として宰相の中將は内大臣兼右大將となる。この時点で、中納言は参内すらない状態となっている。さらに、帝は若宮に位を譲り、宰相の中將に対して、一品の宮と共に後見を務めるよう事後を託す。

「今の帝は、ひとへに、君に預けてんず。幼くて、まつりごとし給はざらんほどは、一品の宮に申し合はせて、臣下をこがましからず、非道まつりごとなく、よくよく後ろ見奉られよ」
(二五頁)

結末部で描かれる宰相の中將と一品の宮の協力は、帝により指示されたものである。また、帝は一品の宮に対しても、宰相の中將との協力を指示している。

一品の宮に、「我、いかになり侍りぬとも、『孝養』とも思し召して、内裏に離れ奉らせ給ふな。母とも、父とも、君一人を頼み奉るべき人にこそあめれ。むげに幼からんほどは、女御代にて、君、摂政と、世のまつりごととはせさせ給へかし」などぞ申させ給ふ。
(二六頁)

一品の宮は若宮と母は異なるが、同じく帝の血をひいている二人だけの姉弟であることから、その御代においても力を行使する正当性がある。しかし、一品の宮は女性である。彼女が政治に関わ

るために必要なのは、前述の帝の言葉により政治に参画する正当性を保証された立場だけでは足りない。実際に政治の場に立つて若宮の後見をする男性の協力者、つまり宰相の中將との協力が要だ。こうして、帝の言葉により、若宮の後見を介して内侍督一族と中宮一族が協力するための状況は整えられた。しかし、この時点では対立の解消に至らない。なぜなら、讓位直後は、「にはかに、御位譲りありて内大臣、関白し給ふ」とあり、一品の宮と協力することなく帝の補佐をしている様子が描かれているからである。両者が協力へと踏み出すのは、帝の即身成仏後である。出家直前、帝は、中宮、一品の宮、宰相の中將のそれぞれに若宮の後見を重ねて頼んでいる。そして出家後すぐに即身成仏した。この突然の別れを残された人々は悲しみ、その後、若宮の後見を頼んでいた帝の言葉を思い返す。

摂政殿は、いかさまにも、御忌みにも籠らせ給ふべけれど、内裏の御ことを仰せられ置きしも恐ろしければ、内裏へ参り給ひても、「かたじけなくあはれなりし御心ばへ、いかなる世にか、なのためにおぼゆべからん」と、恋しく悲しく、「夢にだに、いかでか定かに見奉るべき」と、声も惜しまずぞおはしける。
(三〇頁)

女院も、内侍督のことゆゑにこそ、かたみに、御心置かれ給ひしか。その前々は、いづれの御方候ひ給へど、我をば、すぐれて、え避らぬ者にこそ思したりしか。一品の宮の御こと

を思ひ聞こえ給へば、いかでか疎かに思はん。仰せられし御こともあはれなれば、内裏の上の御ことをば、わが御子にも劣らず、一品の宮と同じく思ひ育み奉らせ給ふ。面影を取りとめ給へるを見るも、いみじくて、

緑子を見るたびごとに愛しきをつらきゆかりと何思ひけん
と、女院は、あやにくに絶えぬ御涙なり。(三二頁)

宰相の中將は帝の言葉を疎かにするまいと決意し、中宮も若宮を自分の子と同じく思つて育てるようになる。この帝の即身成仏という、遺体も遺言もない唐突な別れにより、生前の帝の言葉に従おうとする思いが強まり、対立の解消が達成されるに至つたと言える。

このような物語展開を経て、結末部において「めでたし」を繰り返す大団円に到達する。物語結末部において、対立はもはや解消した。関白を務める宰相の中將の政治は繰り返し「めでたし」と称賛され、政治の中心が内侍督一族に移つた事を中宮一族も受け入れている様子が示される。

関白殿、世のまつりごとめでたく、天の下に、あやしき民
まで受けられ、めでたきためしに引きけり。

前のおとどは、よろづ、目の前に変はることを見て、くち
をししく思しけれども、ことわりのことなれば、ものも言はず
ぞすくし給ひける。

内裏の上は、一品の宮を、母と思し召し、おとどに、何ご

とをも仰せ合はせられて、あさましきまで思ひ出で給ふさま、
ためしなきほどなり。(三三頁)

この箇所だけを読むと、内侍督一族が榮華を独占しているように読めるが、そうではないことが物語結末における、

おとどは、一品の宮と申し合はせて、「めでたきまつりごとな
り」と、民まで言はれ、めでたかりけるとかや。(三四頁)

という記述から窺える。若宮を介し、関白と一品の宮が協力して政治を進めている体制、対立の解消こそ、結末部において「めでたし」と繰り返し称賛されるものなのだ。

以上のように物語を進めると、現存本文における物語展開が結末における対立の解消を意識していないとは考えにくい。『零に濁る』は、宰相中將と一品の宮は協力して政治を進めるといふ結末を構想として持つた上で、物語を展開させていると考えられるのである。

では、なぜ内侍督一族の繁栄ではなく、対立の解消という結末なのだろうか。それは、この対立に帝も関わっていることが関係すると思われる。見てきたように、両一族の対立は、帝の言動によって解消に向かい、結末部で称賛される宰相の中將と一品の宮の協力関係は、帝の指示によって成立したものである。「めでたし」を多用することで、両一族が協力している統治体制を称賛するということは、帝の言葉に従い政治を進めている状況をも讃えており、帝の望んだ通りに政治が行われることを良しとする意識が

働いているのではないだろうか。つまり、若宮と宰相の中將による統治を讃えるよりも、帝の遺言に従い、対立していた宰相中將と一品の宮が協力して若宮を支えている様子こそが、称賛すべきあり方であると示しているのだ。内侍督一族の繁栄を描くだけでは、帝を讃えることにはつながらない。対立とその解消を描くからこそ、その解消を実現させた帝を讃えることに繋がるのである。このように考えると、『雫に濁る』が帝という至高の存在を強く意識した作品であることが窺える。

さらに、宰相の中將の協力相手として一品の宮が選ばれたことから、この作品が王権を意識した上で描かれたものであると考えることも可能ではないだろうか。助川幸逸郎氏は一品の宮を次のように説明する。

「一品宮Ⅱ女一宮」は、『源氏物語』宇治十帖以降、様々な物語の中で「王権の象徴」の役割を演じている。それらにおいては、「一品宮をものにする」ことが「王権の奪取」を象徴する。

『雫に濁る』において、一品の宮は誰と結婚することもない。助川氏の論に従えば、それは王権が奪取されていないこと、王権の存続を意味している。『雫に濁る』における一品の宮は、中宮一族を背負うだけでなく、幼い若宮に代わり、王権をも背負う存在だ。従って、宰相の中將と一品の宮の協力を讃えることは、内侍督一族と中宮一族の対立を解消させた帝の行いを讃えるだけでなく、王権を脅かすことのない政治が行われていることも示しているの

である。

以上のように物語の流れを辿った結果、『雫に濁る』は内侍督一族と中宮一族の対立とその解消を描く物語であると言える。そして、結末部で「めでたし」を繰り返し使い、宰相の中將と一品の宮の協力統治を讃えることで、その対立の解消をもたらした帝の存在をも讃えているのである。

それにしても、「これを御覽せむ人は、念仏申させ給ふべし、必ず、必ず」という末尾の一文は、この大団円とも言える結末に水を差しかねない。この一文をどのように考えるべきだろうか。この一文には、対立の解消に後見しながらも死去した内侍督の存在が関わっていると考えられる。『雫に濁る』結末部では「めでたし」を繰り返すことで、対立の解消と両家の協力という大団円の様子が描かれているが、そのめでたさが強調されるほど、内侍督の悲劇性も浮かび上がる。個人としての立場よりも一族の将来を重んじ、中納言と通ずることなく死去した彼女の姿が残された人々に与えた影響は大きい。彼女の死により、若宮の正当性は確立され、それに伴い宰相の中將一族は繁栄し、一品の宮には若宮の後見という立場が与えられた。先に、他作品では、帝と一族を繋ぐ女性を中心とする幸福な結末が描かれていることを確認した。つまり、『雫に濁る』においては、本来、物語結末部において語られる栄華の中心として描かれるべき存在であった内侍督が、対立の解消という結末に至る過程で物語から退場してしまったのである。『雫に濁る』の結末の中に、彼女の存在意義や、役割の重さを投げ込むものとして、末尾の一文が付されたのではないだろうか。帝も結末

部では生存していないが、彼は死という形ではなく、即身成仏という形で物語から消えたため、内侍督のように、結末に至るための犠牲とは考えにくい。末尾の一文は、対立の解消のため、調和のため、物語の途中で消え、繁栄の中に身を置くことのなかった内侍督のために、読者の「念仏」を求めているのだと考える。従って、末尾の一文を含めて考える場合においても、『雫に濁る』が結末部における対立の解消を意識して描かれた物語であるとする理解は動かないであろう。

以上、結末に着目して『雫に濁る』がどのようなことを描く物語であるかを考察した。本作品は、その結末において対立の解消を描いており、そうした結末を意識した上で物語を展開させていると考えられるのである。

五 おわりに

本稿では、物語の結末に注目し、『雫に濁る』が何を描く物語であるかを考察した。物語結末部で「めでたし」が多用されることに着目し、この結末が、どのような意識のもとに描かれたのかを考察するため、他作品の結末部との比較を行った。結末部で「めでたし」を用いる王朝物語の多くは、一族による撰関職、帝、后の位の独占をもってめでたさとみなしている。『雫に濁る』の結末はこの大団円に当てはまらず、一族の独占的栄華の反対ともいえる、対立の解消という独自の結末を描いていることが明らかとなった。物語はそうした結末に向けて展開されており、その過程で内侍督の死や帝の即身成仏が描かれたと考える。また、内侍督一族の独

占的栄華を描くことなく、対立の解消と協力という結末を描いた理由として、『雫に濁る』が帝の存在を意識していることをあげた。帝の言葉により対立が解消され、民に称賛される政治が行われたということが、ひいては帝を讃えることにも繋がり、単に宰相の中将が若宮を支える様子を描くよりも、より効果的に帝を讃えることに繋がるのである。

このように、一族の独占的栄華ではなく対立の解消という結末を描く『雫に濁る』は、類型的な王朝物語が次々と生み出される時代状況の中で、先行作品を踏まえつつも、その独自性を模索し、生み出された作品であると結論づけることができると考える。

注

- (1) 日下幸男「聖御院本『しづくに濁る物語』《翻刻》——伝為相筆本の道見親王の臨写本——」《王朝文学研究誌》四、一九九四年三月
- (2) 福田将土「中世王朝物語作品解説 雫に濁る」《中世王朝物語・御伽草子事典》神田龍身・西沢正史編、勉誠出版、二〇〇二年五月
- (3) 『古語大辞典』めでたし 語誌(小学館、一九八三年二月)
- (4) 武山隆昭「めでたし」の語誌 下 ——平安後期文学を中心に——《椋山女学園大学研究論集》第十四号第二部、一九八三年二月
- (5) 『栄花物語』《新編日本古典文学全集33 栄花物語③》山

- 中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注・訳、小学館、一九九八年三月)
- 『住吉物語(甲南女子大本)』(『中世王朝物語全集11 雲にに
ごる 住吉物語』室城秀之・桑原博史校訂・訳、笠間書院、
一九九五年一〇月)
- 『住吉物語(藤井本、品州本)』(『鎌倉時代物語集成』第四卷、
市古貞次・三角洋一編、笠間書院、一九九一年四月)
- 『住吉物語(内閣文庫本、広本系八坂家本)』(『新日本古典文
学大系18 落窪物語 住吉物語』藤井貞和・稲賀敬二校注、
岩波書店、一九八九年五月)
- 『住吉物語(大東急本)』(『新編日本古典文学全集39 住吉物
語 とりかへばや物語』三角洋一・石埜敬子校注・訳、小
学館、二〇〇二年四月)
- (6) 『むぐら』(『中世王朝物語全集15 風に紅葉 むぐら』中西
健治・常磐井和子校訂・訳、笠間書院、二〇〇一年四月)
- 『あきぎり』(『中世王朝物語全集1 あきぎり 浅茅が露』
福田百合子・鈴木一雄・伊藤博・石埜敬子校訂・訳、笠間
書院、一九九九年一〇月)
- 『木幡の時雨』(『中世王朝物語全集6 木幡の時雨 風にっ
れなき』大槻修・田淵福子・森下純昭校訂・訳、笠間書院、
一九九七年六月)
- 『小夜衣』(『中世王朝物語全集9 小夜衣』辛島正雄校訂・
訳、笠間書院、一九九七年一二月)
- 『海人の刈藻』(『中世王朝物語全集2 海人の刈藻』妹尾好
信校訂・訳、笠間書院、一九九五年五月)
- (7) 福田景道「幸福な結末——御伽草子と王朝物語——」(『福
祉文化』第三号、二〇〇四年二月)
- (8) 『うつほ物語』(『新編日本古典文学全集 うつほ物語①③』
中野幸一校注・訳、小学館、一九九六年十月〜二〇〇二年
八月)
- 『浜松中納言物語』(『新編日本古典文学全集27 浜松中納言
物語』池田利夫校注・訳、小学館、二〇〇一年四月)
- 『落窪物語』(『新編日本古典文学全集17 落窪物語 堤中納
言物語』三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳、小学館、
二〇〇〇年九月)
- 『源氏物語』(『新編日本古典文学全集 源氏物語②・④』阿
部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出夫校注・訳、小学館、
一九九五年一月・一九九六年一月)
- 『我が身にたどる姫君』(『中世王朝物語全集21 我が身にた
どる姫君・下』片岡利博校訂・訳、笠間書院、二〇一〇年
七月)
- (9) 福田将士氏は、内侍督の死について、「内侍督は中納言の思
いと帝の気持ちとの板挟みにあい、ひたすら気持ちが弱く
なっていく、死を決意する。」と述べている。(同注2)
- (10) 助川幸逸郎「二品宮」(『中世王朝物語・御伽草子事典』神
田龍身・西沢正史編、勉誠出版、二〇〇二年五月)

※ 『雫に濁る』の本文は、『中世王朝物語全集11 雫ににじる

住古物語』（室城秀之・桑原博史校訂・訳、笠間書院、一九九五年一〇月）に拠り、引用末尾に頁数を示した。なお、引用に際しルビは省略した。引用部中の傍線等は、特に注の無い限り、引用者が付したものとす。

（平成二十五年卒業）